

## ナスの育苗期におけるミナミキイロアザミウマの防除

西野敏勝 (長崎県総合農林試験場)

Toshikatsu NISHINO : Chemical Control of *Thrips palmi* KARNY in Seedling Stage

促成, 半促成ナスの育苗は2.5~3ヵ月にもおよび, ミナミキイロアザミウマの防除回数節減が強く望まれている。そこで, 効果の高い新粒剤を活用して育苗期間中の合理的な防除体系を検討した。

### 1. 試験方法

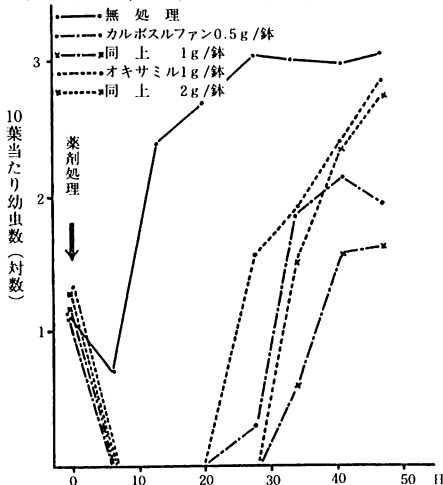
供試品種は黒陽で, 播種が1983年8月18日, 稚苗は9月2日に直径12cm, 深さ11cmの鉢に移した。定植は11月1日である。各試験区は1区10ポットを設け, 苗の4葉期頃まで本害虫の発生したナスを側列において成虫が各区へ均等に飛来する状態とした。試験区の構成は, 第1表および第2表のとおりである。

### 2. 結果および考察

1) 供試粒剤の残効期間 カルボスルファン粒剤の残効期間は, 幼虫に対して稚苗1株当たり0.5gで25日, 1gで30日程度(第1図), 成虫に対しては約5日くらいそれぞれ短縮された。1g区では処理14日後から下葉2~3葉に褐色の斑点が発生し, いくぶん黄化したが, その後の生育は正常であった。オキサミル粒剤の残効期間は, 幼虫に対して稚苗1株当たり1gで20日, 2gで25日程度と推定され(第1図), 成虫に対しては約5日くらいそれぞれ短縮された。

2) 液剤のみによる体系防除 鉢上げ後の9月13日から定植時の11月1日までの48日間, 約7日ごとに7回の薬剤散布を必要とした。DMTP水和剤1,000倍液およびBPMC乳剤2,000倍液の防除効果は十分でなく, 5~7日後にかなりの密度回復がみられた。

### 3) 前半液剤, 後半粒剤の体系防除 前半3回液剤散



第1図 数種粒剤の幼虫に対する残効期間

第1表 液剤体系と粒剤体系の防除効果

使用薬剤	処理量 (鉢当たり)	処理回数	月 9		10					
			日 13	19	26	3	11	17	24	31
液剤体系	—	7	28	34	84	17	1	34	3	26
カルボスルファン粒剤(5%)	0.5g	2	30	0	1	2	14	20	42	34
	1g	2	32	2	1	2	10	6	6	4
オキサミル粒剤(1%)	1g	2	48	0	0	18	40	12	116	118
	2g	2	38	0	0	0	6	4	42	54
無処理	—	—	27	33	590	1,120	2,406	2,144	1,986	2,312

注) 1. 液剤体系; DMT P水和剤(1,000倍)2回, ホサロン乳剤(1,000倍)2回, BPMC乳剤(2,000倍)3回, 9月13日から7日ごと散布。2. 粒剤処理; 9月13日, 10月7日, 3. 成幼虫の合計虫数(20葉)

第2表 前半液剤, 後半粒剤体系の防除効果

使用薬剤	処理量 (鉢当たり)	月 9		10							
		日 13	19	26	3	11	17	24	31		
カルボスルファン粒剤(5%) (前半3回液剤)	0.5g	25	46	201	34	17	78	97	124		
	1g	22	17	137	20	6	15	14	13		
オキサミル粒剤(1%) (前半4回液剤)	1g	32	52	91	11	0	27	2	15		
	2g	38	41	104	36	1	54	1	3		
無処理	—	27	33	590	1,120	2,406	2,144	1,986	2,312		

注) 1. 液剤散布; DMT P水和剤(1,000倍)2回, ホサロン乳剤(1,000倍)1~2回, 9月13日から7日ごと散布。2. カルボスルファン粒剤, 10月7日, オキサミル粒剤, 10月17日処理。3. 成幼虫の合計虫数(20葉)

布後カルボスルファン粒剤を定植25日前に鉢当たり0.5gと1gを処理する区, 前半4回液剤散布後オキサミル粒剤を定植15日前に鉢当たり1gと2gを処理する区は高い防除効果が認められた(第2表)。

4) 粒剤のみによる体系防除 鉢上げ後の9月13日(草丈5.7cm, 4葉期)と24日後の10月7日(定植25日前)に両粒剤を土壌表面処理することにより, 液剤の7回防除に匹敵する高い防除効果が得られ, 液剤のみの使用に比べて防除回数を5回節減できた(第1表)。カルボスルファン粒剤は稚苗期の処理で薬害の発生事例があり, 農薬登録上の使用回数も1回に制限されているので, オキサミル粒剤を育苗期の前半に使用し, 定植20~25日前にカルボスルファン粒剤を組み込む体系が合理的である。